



# H a f a A d a i

令和3年2月26日  
グアム日本人学校  
学校たより  
第8号

## 「少女が大人になる日」

校長 工藤雅敏

とても可愛い白い子犬を抱いた少女が、診察室に入ってきました。少女の名前は明日香さん、中学3年生です。子犬の名前はビーズ、ぐったりした様子です。子犬の具合を聞くと、少し前までは元気だったのが、急に吐くようになり、今では食べ物を全く受け付けなくなったと、心配そうに答えました。

診察の結果は、悪性の腫瘍（がん）でした。長くても、後、半年。例え手術をしても、助かる見込みはなく、だんだん弱っていくが、このまま自宅で過ごさせてもいいこと。あるいは、薬で永遠の眠りにつかせることもできる等、できるだけ優しく説明をしました。お医者さんの説明を聞いている間、少女の手がふるえています。子犬をなでながら必死で考えています。きっと、生まれた時からこの子犬と一緒にいたのでしょう。子犬を見つめる様子で分かります。

15歳の少女が一人で判断するには、あまりにも深刻すぎます。「お家の方に説明しましょう。」お医者さんは父親に電話をし事情を説明しました。そして、少女に受話器を渡し親子で話をさせました。

少女は、声を詰まらせながら話していました。時々、声のとぎれ、受話器を持つ手がふるえています。やがて、長い沈黙の後、受話器を置いて振り向いた少女は、「眠らせることに決めました。」と、涙をこらえながら言いました。

少女は最愛の子犬を、自らの判断で眠らせることに決めたのです。それがどんなに辛いことか、お医者さんにはわかります。

「明日にしましょうか？」と聞くと、「いいえ、今日にしてください。」「ただ、しばらく、私たちだけにしてくれませんか？」お医者さんは、そっと、部屋を出ました。少女の悲しみを思うと、溢れる涙を止めることができませんでした。

しばらくして、少女が出てきました。そして、「お願いします。」と言いました。お医者さんは「辛いですが、見ていた方がいいですよ。とても安らかです。『どんな様子だったろう？』と、いつまでも考えているより、自分の目で見ておく方が楽ですよ。」と言いました。少女は注射をする間、子犬の頭を優しく抱いて、「大丈夫よ、私がついてるわ。」と、繰り返し繰り返し、言い聞かせていました。やがて、子犬は苦しむこともなく、少女の腕の中で静かに眠りについていきました。

こうして少女は、大人になりました。

15歳の春に、中学部3年生の諸君は、苦しみながらも自らの進路を選択しました。これからの人生において、大きく成長していくことを期待しています。

長い間、ご愛読、ありがとうございました。心より、お礼申し上げます。

